

ヘミングウェイの ‘the simplest things’ について (二)

松 田 卓

(一) ‘Undeclared’ の意味について

Byron は、‘Manfred’ において Manfred に次のようにいわせている。

Thou didst not tempt me, and thou could not tempt me;
I have not been thy dupe, nor am the prey—
But was my own destroyer, and will be
My own hereafter—Back, ye baffled fiends!
The hand of death is on me—but not yours!⁽¹⁾

又、Manfred は次のようにもいう。

No, friend! I would not wrong thee nor exchange
My lot with living being; I can bear—
However wretchedly, t’is still to bear—
In life what others could not brook to dream,
But perish in their slumber.⁽²⁾

Manfred は己れの魂を売った Spirit に対しても「死の手はおれの上にある、しかしお前の手ではない。」といい、アルプスの hunter に、「どんなに悲惨なものであれ、おれの運命をお前の運命ととりかえるつもりはない。」ともいう。又、Manfred を救いにやって来た Abbot に対しては次のようにいう。

I hear thee. This is my reply: whate’er
I may have been, or am, doth rest between
Heaven and myself.—I shall not choose a mortal
To be my mediator. Have I sinn’d
Against your ordinances? prove and punish!⁽³⁾

Manfred は調停者に mortal を選ばない。そしてここで Abbot は神、Heaven の意味であるから、Manfred は神も拒否していることになる。次に、Manfred は「生きる」ということは、孤独であると知っているし、孤独であることが正しく生きる条件であると考え。最もよく知るものは最も深く嘆かねばならないのである。Manfred はいう。

I could not tame my nature down; for he
Must serve who fain would sway—and soothe—and sue—
And watch all time—and pry into all place—
And be a living lie—who would become
A mighty thing amongst the mean, and such
The mass are; I disdain’d to mingle with

A herd, though to be leader—and of wolves.

The lion is alone, and so am I.⁽⁴⁾

孤独な Manfred に Spirit さえもあきれて、「お前をそれほど不幸にした人生にどうしてそんなに執着するのか」⁽⁶⁾ という。最後迄 Manfred は Manfred で終る「おれを罰するのはおれだ」⁽⁶⁾ といって一切を拒否して己れの運命を全うする。Byron が己れの愛したギリシャのため Missolonghi で死についたように。しかし、彼は進んで死んだのではない。

Manfred は、Byron が日記の中にのべているように、

There is a vigil, and these eyes but close

To look within; and yet I live, and bear

The aspect and the form of breathing men.

But grief should be the instructor of the wise;

Sorrow is knowledge: they who know the most

Must mourn the deepest o'er the fatal truth

The Tree of Knowledge is not that of Life.⁽⁷⁾

といって、生きることの悲しみは 'breathing men' の運命と受けとる。又、生きている Manfred に眠りはないと宣言されてもいる。

Though thy slumber may be deep,

Yet thy spirit shall not sleep;

There are shades which will not vanish

There are thoughts thou canst not banish;

By a power to thee unknown,

Thou canst never be alone,

Thou art wrapt as with a shroud,

Thou art gather'd in a cloud;

And for ever shalt thou dwell

In the spirit of this spell.⁽⁸⁾

Byron は 1813 年 11 月 27 日の日記で、To withdraw myself from myself, (Oh that cursed selfishness!) has ever been my sole, my entire, my sincere motive in scribbling at all. とのべている。そして Byron にとって詩は又、—It is the lava of the imagination whose eruption prevents an earthquake.⁽⁹⁾ であったし、だからかくことは彼の生きることの証しでもあった。彼は、Were it not thus, it had never been composed; and had I not done something at that time, I must have gone mad, by eating my own heart,—bitter diet.⁽¹⁰⁾ と言っている。Byron が「かく」という時、それはまさに「行動」しているということを意味しているように思われる。彼がもし健全な足をもっていたら、彼が自らもいうように詩人であったか否かはわからない。彼は、I verily believe that nor you, nor any man of poetical temperament, can avoid a strong passion of some kind. It is the poetry of life. What should I have known or written, had I been a quiet, mercantile politician, or a lord in waiting? A man must travel, and turmoil, or there is no existence.⁽¹¹⁾ と言っているし、又、—Who would write who had anything better to do? "Action-action-action"—said

Demosthenes: "Actions-actions", I say, and not writing,—least of all, rhyme—. と 1813 年 11 月 24 日にのべている。Byron にとっても 'Actions' が彼の存在のための唯一のものであったのである。彼はギリシャに遠征する時まさに、'Corsair' の Conrad であったといわれている。⁽¹²⁾

—All you have to do is write one true sentence,—とか—Write truest sentence that you know,—という時の Hemingway の言葉と Byron が —To withdraw myself from my self— というその言葉との間にわたしは本質的な違いがあるといったが、これは Byron を Byron たらしめている所謂 Oh cursed selfishness! という彼の叫びが説明していると思う。しかし又、わたしはその相違は絶体的に異質のものではないと思う。Byron と Hemingway は様々な点で相似ているからである。Hemingway とその母親の関係は、Byron とその母親の関係が、後者ほど極端に愛憎があきらかでないにしても、類似点をもっている。Hemingway が Oak Park を去ってゆくことに、その母親が理由となっていると思わないわけにゆかない。'As I lay me' や 'A Soldier's Home' の Nick, Krebs などにこの辺りのことを理解する鍵がある。(+)に於いて Hemingway が a man of action になってゆく必然性についてふれたが、a man of action にとっては、Byron がいうように —A man must travel, and turmoil, or there is no existence,— が必然的であるし、"You oughtn't to ever do anything too long. "Too damn long," "It's no good doing a thing too long," という 'An Alpine Idyll' の John と Nick は意見が一致する。'Today is Friday' で 3 人の兵士は "You been out here too long," ということで、考えは同じである。ここで、too long ということは no existence と結びつく。too long の正しい認識は次の行動への前提である。人間が生きてゆくことは彼らにとって、選択 (selection) の連続でありそれは生きることの意味の、唯一の把握の方法でもある。この生き方 (how to live) は a man of action として在存することで、Byron にあっては Corsair の Conrad であり、Cain であり Manfred であり更に Sardanapalus となることであり Don Juan となることであった。Hemingway にとっては、Manuel Garcia であり Santiago であり、Hemingway その人であった。'The Undefeated' の Manuel, 'The Old Man and the Sea' の Santiago の creed は 'Death in the Afternoon' の闘牛の美学であって、又 Hemingway 自身が生きてゆく上での「力学」でもあった。そしてそこでの相手は常に「死」そのものであった。

—The only place where you could see life and death....—⁽¹³⁾ と Hemingway が述べる時、彼は次の言葉がその前にある。—but the real thing, the sequence of motion and fact which made the emotion and which would be as valid in a year or in ten years or, with luck and if you stated it purely enough, always, was beyond me and I was working very hard to try to get it.—⁽¹⁴⁾ そして彼がそこに期待したものは violent death であり、one of the simplest things of all and the most fundamental なものであった。彼はそこで、—certain definite action which would give me the feeling of life and death that I was working for.—⁽¹⁵⁾ という自分を超えて存在するもの、the real thing を捉えた。このことは、人間が活着していることによって、人間に纏いつく一切のものを切りすてて、つまり人間の眼をくもらせているものをはぎとって、唯一の真実を白日のもとにさらすことであったといえよう。当然そこに要求されるものは闘牛士が牛に対する時の勇気であり厳格な掟であった。このいづれが欠けても悲劇である闘牛は喜劇に変わってろう。⁽¹⁶⁾ 又、闘牛はひとつの儀式であって、これに従わなければ、たちまちそこには冷厳な死が悔蔑と共に現れる。技術的な誤りを犯

し、怯懦に捉われた闘牛士の死は自殺と同断であり、観衆がこれに何の同情も示さないのは、自殺に同情を示さないのと同じであると Hemingway はのべている。恐怖に捉われて、掟に従わないということは真実をみることに、正しく exist することの放棄である。Santiago は、—It was too good to last, he thought. I wish it had been a dream now and that I had never hooked the fish and was alone in bed on the newspapers.

‘But man is not made for defeat,’ he said. ‘A man can be destroyed but not defeated.’—⁽¹⁷⁾ と考えた。そして、‘Sail on this course and take it when it comes.’ と自らにいい、それは、結局 —Because it is all I have left— であるのだ。Santiago は自らに‘考えるな、老人’という。しかし又思いなおして、‘考えなけりゃ、それが俺にのこっている全てなのだ’と思う。Santiago は Manfred のように、Sorrow is knowledge. とは思わない。アルプスの Hunter のように、健全である。が「釘が手の平を貫いて木にささってゆくのを感ずる」けれども、A man is not made for defeat. は彼の生きてゆく上での守るべき掟で、真実なのである。

Camus は次のようにいう。

「意識的でありつづけ 反抗をつらぬく、——こうした拒否は自己放棄とは正反対のものだ。人間の心のなかの不撓不屈で熱情的なもののすべてが拒否をかきたてて人生に刃向わせるのだ。重要なのは和解することなく死ぬことであり、すすんで死ぬことではない。」⁽¹⁸⁾ Camus は続けて、「不条理とは、かれのもっとも 極限的な緊張、孤独な努力でかれがたえず 支えつづけている緊張のことだ」とのべている。

Hemingway は Santiago の苦しみを次のように説明する。

—‘Ay,’ he said aloud. There is no translation for this word and perhaps it is just a noise such as a man might make, involuntarily, feeling the nail go through his hands and into the wood.—⁽¹⁹⁾

正しく Santiago は孤独であり、‘Ay’ は ‘word’ でなくて ‘noise’ である。戦う人間の限界状況から迸る真実で、誰に理解されることもない noise なのである。ここには、象徴の入りこむ余地はない。まさに釘が手をつらぬいて木にささりこむ、それ丈である。不撓不屈の一人の人間の対決がある丈であり、‘The Undefeated’ の Manuel の拒否と同じものである。Manuel は ‘You couldn’t do a thing like that.’ といってまわりの人間が彼の coleta を切りとろうとする時、死につつ、彼はこれを拒否する。絶体に彼は認めない。‘I was going good.’ ‘I didn’t have any luck. That’s all.’ というだけで、Manuel は。

Manuel も、Santiago も、Francis Macomber も Henry と同じように「わな」=不条理=にかかった孤独の、拒否の人間である。Andreson の「かべ」はまさにこの不条理のかべなのであった。Camus は、「不条理と不条理にあい応ずる生の増大とは、人間の意志には依存しない、人間の意志の対立物である死に依存するのだ。慎重な言い方をすれば要はひたすら運の問題だ」⁽²⁰⁾ といっている。Manuel は死に依存し、運がなかった。

まさに、Manuel も、Santiago も Andreson も Harry でさえも、3 人の兵士達も Andreson の「不条理の壁」を認識している運のない人達であった。

カミュは実存主義者を「哲学上の自殺者」と呼んで自分が実存主義者でないと断言する。この不条理な世界には解答はないにも拘らず、彼らは解答を与えるからである。彼ら実存主義者の哲学は不条理から出発し乍らも、自分を押しつぶすものを絶体者として、人間を売りわたしてう。Santiago や Manuel の努力の不毛は始めから明らかであったし、あとからあとから

襲いかかってくる Shark は彼らの成功、努力をすべて空しくしてしう。Camus は又、「創造はまた、人間の唯一の尊厳——すなわち、自己の在り方に対して執拗な反抗を試み、努力が不毛だとわかってい乍らなお辛抱よく努力をつづけるという姿勢——の、驚くべき証言である。」⁽²¹⁾ と彼の美学を展開する。

Hemingway の扱う人間は、複雑な、知識というものと無縁である場合が多い ‘The Snows of kilimanjaro’ の Harry や ‘For Whom the Bell Tolls’ の Jordan は、一応知識人である、しかし彼らも Hemingway 自身が知識を拒否しているように、知識の世界から逃れる。これは明晰も合理性も世界を明確になし得ないし、不毛のものと知っているからであろう。しかし、それでも世界は人間と対立して存在する。世界は説明不可能のまま人知を超えている。そして、「死」は必然的である。永遠に存在することを願う人間の意識は不条理を認識し、認識が深ければ深いほど、「生」を肯定させ「死」を拒否する。不条理を不条理として認識するけれどもここからの逃避は認めない。これが不条理の人の姿であって、The killers の Andreson の「壁」の認識はやがて、Manuel や Santiago の不撓不屈の反抗の精神を導き出す。‘Winner Take Nothing’ は死に直面する人間の当然の帰結である。Santiago にも何ものこらない。‘Sisyphe の神話’ の Sisyphus がこのことをよく説明している。Sisyphus に一切の希望はない、あるのは石を運び上げる労役のみである。にも拘らず Sisyphus は只、石を押し上げる。あるのは闘争のみである。そしてこの闘争、労役が彼の目的である。それはそのまま、Santiago の闘争でもある。Camus も Hemingway も又 Sisyphus 的であった、が Camus は自動車事故で死に、Hemingway は普通の人なら当然死んだような飛行機事故でも、自動車事故でも死ななかった。共に行動的であったが、Camus はより imaginative であり Hemingway はより active であった。Byron は —A man must travel, and turmoil,— といい、Camus は「重要なのはもっともよく生きることでもっとも多く生きることだ」⁽²²⁾ という。この限られた世界で生きる不条理の人は「可能な限り多量に感じとり可能な限り多くを生きる」べきであって、この「唯一の障害、唯一の《儲けそこない》は夭折によって起る」⁽²³⁾ とも言った Camus は儲けそこなった不運の人であったのだろうか。

Byron が、‘travel’ とか ‘turmoil’ とかいい、Camus が「多く生きる」という時、Hemingway は ‘too long’ という。このことは三者三様に ‘action’ を求めていることを示す。Sisyphus のように、その労役、行為自体が目的でもあった。Hemingway は、「死」を求めて、行動の人となった。そして、その行動が文学に結びつく。彼の文学が私小説的であるといわれる理由である。そして又、その文学の故に激しく行動にむかうことにもなる。行動が同じく繰り返しである時、彼にとって ‘too long’ になり、行動は、新しい意味をもたなければならない。そしてその行動が複雑さを拒否するのは、本質的なもので、動詞 (VERB) が複雑さを意味しないのと同じである。更に行動は単純である所に強さがあり訴える力は強い。生と死の中にある人間の行動は単純以外のものでなく、死を媒体とした生が唯一の目標となる。そしてそこに、雑駁な修飾物は不要のものとなる。故に一般的な「道徳」も無用のものとなる。Hemingway はいう。—So far, about morals, I know only that what is moral is what you feel good after and what is immoral is what you feel bad after and judged by these moral standards,— そして出来るだけ行動することによって生きる感覚を得る。これは Camus の多く生きることである。故に Hemingway にあっては、結婚の回数も多ければ多い程よいことになり、ひとつの結婚も長すぎではいけないし、複雑であることはもちろん拒否される。“Once a man's married he's absolutely bitched,” と Bill はいい、“He hasn't got anything

more. Nothing. Not a damn thing. He's done for.”(25) そして、更に “If you'd have married her you would have had to marry the whole family.”、といている。失恋した Nick に対していう Bill の言葉である。Nick はまさに “You came out of it damned well,” なのだ。Byron は自分の結婚について “It was an experiment and proved a failure”(26) と Trelawny に語った。行動の人にとって、結婚は、実験でありひとつの経験に過ぎない。「不条理の確信は経験の質を量に置き換える」(27) に至る。しかし、このことはなかなか容易ではない。特に Hemingway のような作家にとっては。何故なら行動はやがて人間の老化と逆比例するからである。Hemingway の不条理性はこの肉体的強靱さにも関わりがある。彼は普通の人であれば死んでいるような事故においてもフィニックス (Phoenix) のように甦った。しかし同時に繊細な感覚や Sentiment ももち合せている。Byron の自我が、彼の「家」や、父・母の、又彼と母との関係、そして己れの physical defect などによって燃え上るように形成されたのに似て、Hemingway においては、その不条理は彼の肉体とその精神の深刻な対立から生れているし、又、父・母の関係も不条理な関係であることは明かである。‘Indian Camp’ の生は死によってうみ出されているとは (-) においてふれた通りである。そして行動の人 Hemingway は徐々に老化の道を辿る。‘A Clean, Well-Lighted Place’ の younger waiter は “I wouldn't want to be that old. An old man is nasty thing.”(28) という。Sisyphe ではない Hemingway の悲劇である。‘The killer’ の Andreson も、Manuel, Santiago, ‘Fiesta’ の Jake, は、Sisyphe のように石を押し上げている。Harry や Jordan は量を質に置きかえるかにみえる。つまり ‘Winner Take Nothing’ に安んずることが出来ない。制作年代順に、考えると ‘The Old Man and the Sea’ が最後に属し、1952 年、Hemingway 53 歳の時の作であるから必らずしも老化は甚しかったのではないように思える。そして、更に、1954 年に、Uganda で二度も飛行機事故に遭っているのだから、彼は自分の老化を認めようとしなかったのかも知れない。丁度 ‘The Undefeated’ の Manuel のように。それと ‘The Old Man’ は実際に彼自身の経験と見聞した事実に基づいているというから、Model がその通り不屈の人であったと思えるが、Hemingway その人の資質であったと考えるのが当を得ていよう。彼の死後出版され、出版される前から種々、噂のあった作品が ‘Islands In the Stream’ であるが特に噂にのぼった程の大作とも思えない。

「自殺はメロドラマにおいてのように告白することだ」(29) と Camus はいう。又、「人生を理解しないということを告白することだ」ともいう。告白するということは饒舌を伴う。Hemingway の文学は饒舌を拒否する。そして、又解答を与えようとしなない。強いて解答を我々が引き出すとすれば、わたしが何度かもち出した、‘Winner Take Nothing’ であろう。しかしこれは答えでもない。始まりですらあろう。人生、世界の認識の答えではある。矢張り Sisyphe の労役と同じことである。‘Indian Camp’ での子供の生は父親の死によってであったし、Andreson には「壁」が横たわるだけである。Krebs にもどこかゆこうと思うが特にゆくところもなく、母親のくどきに毎日を送っている。しかし、“I'm your mother”, “I held you next to my heart when you were a tiny baby”(30) という母親の言葉を聞いた時、Krebs は胸がむかついて、吐きそうになる。そして母親が祈ろうといっても、Krebs には出来ない。Krebs は神の王国にいないという。が己れの誠実を守るために嘘をつかざるを得ない。たしかにここでの Krebs の行動は、Krebs に与えた戦争の after effect だと人はいうかも知れない。しかし、Hemingway には戦いというものの意味はわかっていたし、戦いに彼が求めたものはそのような、ある意味で、女々しいものではなかった。Krebs は ‘Three-Day Blow’ の

Nick であり、Bill のいった家というものの複雑さと愚しさを示しているに過ぎない。故に、Krebs が —sick and vaguely nauseated— と感じたのはそこに不条理を認識したからである。

Francis Macomber は人生の意味を悟ったかにみえた時、人生の意味といわない迄も、自分の人生の存在を充足するものを理解したと思った時に妻に殺されて了う。恐怖にうち勝った時 Macomber は死んで了う。Hemingway はこのような生を本当に *The Short Happy Life* と思ったのだろう。結局勝った Macomber には何も残っていない。‘*The Short Happy Life of Francis Macomber*’ をかいた時の Hemingway は 37 歳で、彼の最も作家としての生命が燃焼していたときである。彼は、何ものも恐れず、Macomber のように恐怖に打ち勝ったと自負していたと思われる。

「真の芸術作品は、つねに人間の尺度に釣合っている。それは本質的に、《よりすくなく》語るものだ。……作品が説明的文学の花文字で飾られた仰々しいページのなかに、全経験をもちこんでいると自負している場合」⁽³¹⁾ は芸術家と経験の全体と作品との間の悪い関係だと Camus はいう。そして作品は経験のなかから切りとられたダイヤモンド一切平面でなければならないというのである。

この時期までの Hemingway の作品は、いわば ‘*To Have and Have Not*’ をのぞいて、説明的文学の花文字で飾られたものではなかった。‘*To Have and Have Not*’ は、説明的であり、何か意図をもっていると思われ、彼が自ら政治や社会に背を向けるといった決意に違背しているのだ。1940 年の ‘*For Whom the Bell Tolls*’ は一層饒舌になってくる。いわゆる melodramatic になって、多くを語るのだ。Robert Jordan は、進んで死んでゆく。そしてそこには Santiago のあの徹底した抵抗の姿勢はない。たしかに Jordan には社会改造への志向があり、そして戦争の意味づけすらもある。しかし Hemingway にとって、戦争は、その中に「死」をみつめることと、‘*In Our Time*’ の扉の挿話のような、pictorial で、perspective な意味づけがあったに過ぎない筈だ。‘*The Undefeated*’ の Manuel は死につつも「死」を認めなかった、が Jordan は melodramatic に死んでゆく。しかも社会改造への熱意も、いかにもインテリらしく曖昧である。わずかに —Maybe that is what I am to get now from life. Maybe that is my life and instead of it being threescore years and ten it is forty-eight hours or just threescore hours and ten or twelve rather. Twenty-four hours in a day would be threescore and twelve for the three full days.

I suppose it is possible to live as full a life in seventy hours as in seventy years ;—⁽³²⁾ と考える Jordan がすべてを拒否し、己れを保持しているだけだ。ここには未来もなく過去もなく Maria との充実した瞬間があるだけで、饒舌さはない。しかしその表現は饒舌である。Pilar も Jordan も、二人ともにそれ程単純な人物ではない。Pilar のように、その経歴からみれば当然のことだが、これほどものわかりがよくて、人生の苦しみから得た哲学を口にする女はいない。Jordan もいつも自分の生きていること、ここでは戦うこと、橋をこわすこと、と Maria との愛と、大学での勤めのことや、つまり将来のこと、を頭から離すことが出来ない。だから ‘But so simple I am very complicated. Are you very complicated, *Inglés?*’⁽³³⁾ と Pilar が Jordan に聞くと、Jordan は ‘Nor not so simple’ と答える。—The horses made him rich and as soon as he was rich he wanted to enjoy life. Pretty soon he'll feel bad because he can't join the Jockey Club, I guess, he thought. *Pauvre Pablo. Il a manqué son Jockey.*—⁽³⁴⁾ Jordan は徹頭徹尾考える人になり Pablo のことを *Pauvre* な

ぞと思うのである。‘For Whom the Bell Tolls’において Santiago に似ているのは、Anselmo 位のものであろう。しかし Anselmo も Santiago よりも哲学的である。Anselmo は Santiago のように何も持っていない。“Also I am an old man without horses.”で “I am an old man who will live until I die.”⁽³⁵⁾ Anselmo は、Santiago より、罪についても考え悩む。彼は “I am an old man who is afraid of no one”⁽³⁶⁾ というけれども、主義のためにでも人を殺すことに常に苦しみを感じる。Jordan はこの Anselmo にいう。“To win a war We must kill. That has always been true.”⁽³⁷⁾ Anselmo はいつも “... But with or without God, I think it is a sin to kill.”⁽³⁸⁾ と思っている。そして Manfred がそうであったように、人を殺してもその罪を赦すのは自分だという。“Clearly I miss Him, having been brought up in religion. But now a man must be responsible to himself.”⁽³⁹⁾

Jordan が “Then it is thyself who will forgive thee for killing.” といえど Anselmo は “そう信じている。”という。そして Anselmo は人殺しは Pablo にまかすとけというけれども Pablo は尚一層人殺しが嫌だし、いつも酒に酔っているのは、殺した人間のことが忘れられないからで、又そのためにみんなから憶病だといって、軽蔑される。‘For Whom the Bell Tolls’ に登場する人物は、殆んど悩む人である。この説明的饒舌さは ‘To Have and Have Not’ にもあてはまる。もつものともたないもの、有閑階級と、もたないために、いつもどこかで反社会的活動をすることで、生きるものとの比較をして、何か一種反ヘミングウェイ的なものを語ろうとしているのだ。つまり、「社会、政治との関り合い」⁽⁴⁰⁾ を拒み乍らその関り合いを求めて、Rovit の barbershop reading にしたことになる。Richard Gordon の妻にも再び Hemingway は語らせている。“No, not all right. All wrong and wrong again. If you were just a good writer I could stand for all the rest of it maybe. But I’ve seen you bitter, jealous, changing your politics to suit the fashion, sucking up to people’s faces and talking about them behind their backs. ...”⁽⁴¹⁾ 彼はそうなることを軽蔑し乍ら、自らそのわなにかかってしまったのであろうか。しかも社会・文明批評までもやっている。こんな時代には気が違っているのが一番だとか、⁽⁴²⁾ 織物工場のストライキをかく Gordon に、奴らにまどわされたらいけないと、⁽⁴³⁾ 気違い(?)の Spellman に忠告させたりしている。この奴らとは批評的言辞を弄すもののことであることは明らかである。

‘Across the River and Into the Trees’ は、51歳の Hemingway が書いたということを知れば驚くほど感傷的であり 哀しい物語りというほかはない。51歳という年齢がこれほど男に若い心をのこしているのかと驚かせもする。51歳の感傷と、51歳という年齢と、美しき 19歳というその差の喚び起す哀感ともいうべきであろう。老大佐は「カード」のくばり直しを冗談に紛わし乍ら真剣に願いつつ、己れの過して来た戦いのいまわしさを様々な感慨に批判を織りまぜ乍ら少女に語る。絵画についてもひとがとの知識をもち、古い建築物や、Shakespeare や Byron のことも知っている老大佐は、3人の女を愛し、4人目の最も美しい女を手に入れて、⁽⁴⁴⁾ 最後の round だと思い、どこでこれが終りかと身のまわりの整理をしたりする。少女から貰った彼女の肖像画に話しかける老人に、全てを一挙に失おうとしている人の悲劇をみる思いさえする。

いづれにせよ、この Colonel には、ある意味では real な、ある点では、極めて反ヘミングウェイ的と考えられる面が多い。老大佐は、自虐的にもなり、神の加護まで求めたりするような当然とはいえる人の弱さを身につけて了っている。又しばしば、—They had this knowledge shared between them and it was for this reason and for a true, good hatred of all

those who profited by war that they had found the Order— というように戦争とか、社会とかに批判をあげている。上官に楯つくことや世間に楯ついたりすることは、結局何にもならないと反省して、彼は、“I try always to be just, but I am brusque and I am brutal and it is not that I have erected the defence against brown-nosing my superiors and brown-nosing the world. I should be a better man with less wild boar blood in the small time which remains.”⁽⁴⁵⁾ という。次いで、昔とあまり変らぬ身のこなしだと思いながら、自嘲的に、もう年寄り猫だとも考える。—..., still cat-like when he moved, although it was an old cat now,—⁽⁴⁶⁾ 傷ついた手をみせることも、自分でみることも嫌な大佐は Byron が、“I hope this accursed limb will be knocked off in the war.”⁽⁴⁷⁾ といったのと似て、“You don't think we could skip it”⁽⁴⁸⁾ と Renata に語る。そして19歳の類稀れな美少女の Renata に“.... But how would you like to be a girl nineteen years old in love with a man over fifty years old that you knew was going to die?” といわれて、“You put it a little bluntly.” といい乍ら、“But you are very beautiful when you say it.” と答える。

‘Across the River and Into the Trees’ は晩年の Hemingway の感傷と思わぬ訳にゆかないし、過去を振り返っての、又現実の未来に向っての愚痴ともとれる。幾度も幾度も戦いの話しをしては、もう止そうと思う。でも矢張、彼に語れるのはそれしかない。次の老大佐の言葉は戦時中の自分自身の行動に加えた批判とも考えられる。自分自身とは、Hemingway 自身のことである。“To ride herd on them, and to wield the pointers, there is a group of pistol-slappers. We call a pistol-slapper a non-fighting man, disguising in uniform, or you might even call it costume, who gets excited every time the weapon slaps against his thighs. Incidentally, Daughter, the weapon, not the old pistol, the real pistol, has missed more people in combat than probably any weapon in the world. ...”⁽⁵⁰⁾

The Colonel が “You're my true love. My last and only and true love” と呼びかける Renata が、“Don't you see you need to tell me things to purge your bitterness?” “Tell me some more please and be just as bitter as you want.”⁽⁵¹⁾ というのは Byron が “by eating my heart,—bitter diet”⁽⁵²⁾ ということと同じなのかも知れない。が、いづれにしてもここでの Colonel Cantwell は Santiago でもなく、まして Manuel Garcia でもなく、まさに、old cat になっている。あの限界状況の中で、「死」と対決して不撓不屈の精神を養って、「不条理」の人間として徹底出来た筈の Hemingway も結局、Killinger のうい existentialist ではあっても、Camus のいう L'homme Revolté たり得なかった。Killinger は次の如くいっている。—The significant thing is that facing death (or so he thought) made the little thing unimportant to him, and that when death was removed as imminent threat, he relapsed into ordinary childishness. To perpetuate the existentialist attitude, it is necessary to continue to experience death and violence.—⁽⁵³⁾

Hemingway は最も単純なこと (the simplest things) から始めて結局複雑なこと (complicated things) への道を歩んでいったことになる。これは必然的な、人間の辿るべき道であったのか、それとも Byron はその愛するギリシャで「夭折」し、Camus も又、‘Across the River and Into the Trees’ の Colonel Cantwell が19歳の少女を恋人として得たように、Hemingway 自身が Mary Welsh と結婚した同じ47歳で、不運にも「夭折」したことが、彼らを最後まで、L'homme Revolté にし終えたのか、或いは ‘A Farewell to Arms’ の

Henry のように、これもひとつの TRAP であったのかは、わからない。

Hemingway は *Dead Gods* に見離されて、自らをその執行人としなければならなかったことだけは明らかである。ただ 'Across the River and Into the Trees' をかいてすぐあとに 'The Old Man and the Sea' でいくらかの感傷や、過去への回帰性をほのめかし乍らも「不屈の人間」Santiago を創り得たということに、疑問はのこるけれども、これこそまさに、自らを自らの死刑執行人にせざるを得なかった Hemingway の最後の抵抗であったのかも知れない。

—...and he felt a sudden white-hot, blinding flash explode inside his head
and that was all he ever felt.—⁽⁵⁴⁾

—The hand of death is on me—but not yours!—⁽⁵⁵⁾

Notes: (1) Act III, Scene IV: Manfred by Byron.

(2) Act II, Scene I: ditto.

(3) Act III, Scene I: ditto.

(4) ditto.

(5) Reluctant mortal!

Is this the Magian who would so pervade
The world inuisible, and make himself
Almost our equal?—Can it be that thou
Art thus in love with life? the very life
Which made thee wretched!

Act III, Scene IV: Manfred.

(6) Old man! there is no power in holy men,
Nor charm in prayer—nor purifying form
Of penitence—nor outward look—nor fast—
Nor agony—nor, greater than all these,
The innate tortures of that deep despair,
Which is remorse without the fear of hell,
But all in all sufficient to itself
Would make a hell of heaven—can exorcise
From out the unbounded spirit the quick sense
Of its own sins, wrongs, sufferance, and revenge.
Upon itself; there is no future pang
Can deal that justice on the self-condemn'd
He deals on his own soul.

Act III, Scene I: ditto.

(7) Act I, Scene I: ditto.

(8) ditto.

(9) Byron's Diary 1813. 11.

(10) ditto. 1813. 11, 17.

(11) Peter Quennel の 'Byron' による, 1820年8月の Byron の Diary?

(12) In action he shows himself a man of action. At Missolonghi, he is the only one who does not lose his head. It is probable that had it not been for his infirmity, he might have been destined for a life of action. At least that is what he thought himself. But, incapacitated for action by his bad leg, he fell a prey to ennui.

Introduction to the Letters of Lord Byron by Andrés Mauroi.

又,

You never know a man's temper until you have been imprisoned in a ship with him, or a woman's until you have married her.—I never was on shipboard with a better companion than Byron, he was generally cheerful, gave no trouble, assumed no authority....

p. 159. The Last Days of Shelley & Byron edited by J. E. Morpurgo.

- (13) p. 10, Death in the Afternoon—Jonathan Cape.
- (14) ditto.
- (15) p. 11, ditto.
- (16) Chap. II. III. Death in the Afternoon.
- (17) p. 96, The Old Man and the Sea—Jonathan Cape.
- (18) p. 128, Sisyphe の神話. 新潮社.
- (19) p. 98, The Old Man and the Sea.
- (20) p. 135, Sisyphe の神話.
- (21) p. 185, ditto.
- (22) p. 133, ditto.
- (23) p. 135, ditto.
- (24) p. 11, Death in the Afternoon.
- (25) p. 107, The Threc-Day Blow in The first 49 stories.—Jonathan Cape.
- (26) 'As to my marriage, which people made such ridiculous stories about, it was managed by Lady Jersey and others. I was perfectly indifferent on the subject; though I could not do better, and so did they. I wanted money. It was an experiment, and proved a failur...' The Last Day of Shelley & Byron.
- (27) p. 134, Sisyphe の神話.
- (28) p. 311, A Clean, Well-Lighted Place in The First 49 Stories.
- (29) p. 84, Sisyphe の神話.
- (30) p. 128, Soldier's Home in The First 49 Stories.
- (31) p. 170, Sisyphe の神話.
- (32) p. 161, For Whom the Bell Tolls,—Jonathan Cape.
- (33) p. 151, ditto.
- (34) p. 20, ditto.
- (35) p. 19, ditto.
- (36) Ibid.
- (37) p. 43, ditto.
- (38) Ibid.
- (39) Ibid.
- (40) p. 25, —An Interview with Ernest Hemingway, by George Plimpton—
in Hemingway His Critics, edited by C. Baker. Hill and Wang.
- (41) p. 184, To Have and Have Not.—Jonathan Cape.
- (42) p. 194, 'I tell you it's the 'only way to be happy in times like these....'
—To Have and Have Not—
- (43) p. 195, 'No offence,' he said. 'You're a good writer. Keep right on with it. Remember I'm always happy. Don't let them confuse you. See you again.'
—To Have and Have Not—
- (44) 彼の、この Across the River and Into the Trees を書いた年代 (1950) と彼の4度目の結婚をした年 (1946, 47 才) を考えれば、かなり現実的な感じがする。Mary Welsh は For Whom the Bell Tolls の Maria の如き人であったということから、いかにも Renata に対する大佐の感想は real に思われる。
- (45) p. 57, Across the River and Into the Trees.—Jonathan Cape.
- (46) p. 62, ditto.

- (47) p. 166, The Last Day of Shelley and Byron.
- (48) p. 73, Across the River and Into the Trees.
- (49) p. 79, ditto.
- (50) p. 198, ditto.
- (51) p. 200, ditto.
- (52) Byron's Diary: 1813, 11. 17.
- (53) The Role of Death in Hemingway—And the Dead Gods by John Killinger.
- (54) p. 39, The Short Happy Life of Francis Macomber.; in The First 49 Stories.
- (55) Act III, Scene IV, Manfred.
- * Hemingway の作品は Jonathan Cape 出版の単行本, Byron のものは The Works of Lord Byron, Poetry Vol. IV, Octagon Books Inc. New York. Byron の日記は, Byron A Self-Portrait: Letters and Diaries, edited by Peter Quennell.